道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

# 北海道創生ジャーナル 創る

Vol.24

2023.7

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.

## CONTENTS


特集

01 民間のノウハウや知見を地域へ
「地域活性化起業人」制度活用事例

■ 官民連携による空き家対策（栗山町）
■ 町温泉・ホテルの経営改善と賑わい拠点の創出（月形町）
■ 観光を軸とした地域活性化（中富良野町）

05 地域が動く・プロジェクト最前線
北広島市　ボールパーク構想と連携したまちづくり

知事が地域訪問する機会に地域で活躍されている方をお訪ねし、その様子を紹介
07 「なおみちカフェ」から　～地域創生のヒントを探る～

■宗谷編　枝幸町「ふるさと教育」推進プロジェクト
■オホーツク編　北海道大空高等学校

人と地域との新たなつながりを生み出すワーク施設とコンシェルジュを紹介
09 「つながる。HUBest」[北海道型ワーケーション普及・展開事業]

■ naniro BASE & Lab.（名寄市）　黒井理恵さん

特集

# 民間のノウハウや知見を地域へ「地域活性化起業人」制度活用事例

活用市町村紹介

栗山町

月形町

中富良野町

「地域活性化起業人」制度は、民間企業等の社員が、そのノウハウや知見をいかしながら地域独自の魅力や価値の向上、地域経済の活性化などにつながる業務に従事し、自治体と協力して、地方への人の流れを創り出すことを目的とした総務省所管の制度です。

この制度は、三大都市圏に本社がある企業の社員を三大都市圏以外の市町村などへ派遣することで、自治体にとってはこれまで企業が蓄積してきた専門知識や人脈を活用し、外部の視点やスピード感を持って地域課題に取り組むことができる一方、企業側にとっても社会貢献や多彩な経験を積ませることによる人材育成やキャリアアップなど、双方にとってのメリットがあります。また、起業人の受け入れ等に要した経費は特別交付税によって措置されます。

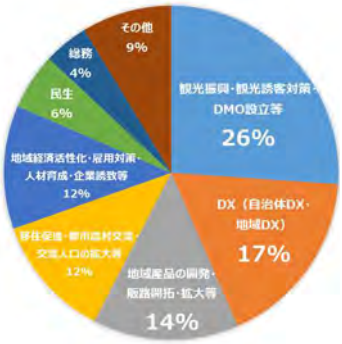
| 年度 | 全国 | 北海道 |
|---|---|---|
| H29 | 50(57) | 7(8) |
| H30 | 56(70) | 7(8) |
| R1 | 65(95) | 7(9) |
| R2 | 98(148) | 9(12) |
| R3 | 258(395) | 26(45) |
| R4 | 368(618) | 47(92) |

▲活用自治体数の推移(括弧内は人数)
(総務省ウェブサイトから抜粋)

制度活用状況では、特に、近年のポストコロナを見据えた観光振興やデジタルトランスフォーメーションに力を入れる自治体が増えていることなどから、令和4年度には過去最高の全国368の自治体において、618名が活躍するなど、多くの自治体で活用されています。

北海道においても、活用が活発となっており、令和4年度の派遣実績は前年度の45人から2倍の92人、受入自治体は47団体と過去最高となりました。派遣元企業としては、大手旅行会社やICT関連のほか、自治体が抱える課題解決に特化したノウハウを持つ企業など、活用にも幅広い広がりを見せています。

今回は、そうした活用の中から、創意工夫を凝らした活用を進め、地域の課題解決を図る自治体を紹介します。




▶北海道の自治体に派遣された起業人の活動分野の内訳（令和4年度）

## 地域活性化起業人制度
（企業人材派遣制度）

（総務省ウェブサイトから抜粋）

**対象者**

三大都市圏に所在する企業等の社員（在籍派遣）

**受入団体**

- 三大都市圏外の市町村
- 三大都市圏内の市町村のうち、条件不利地域を有する市町村、定住自立圏に取り組む市町村及び人口減少率が高い市町村

**活動内容**

地域活性化に向けた幅広い活動に従事

○観光振興　○地域産品の開発・販路拡大　○ICT分野（デジタル人材）

○地域経済活性化（中小企業のハンズオン支援）○中心市街地活性化　等

**特別交付税措置**

- 派遣元企業に対する負担金など起業人の受入に要する経費(上限額：年間560万円/人)
- 起業人が発案、提案した事業に要する経費
  （上限額：年間100万円(措置率0.5)/人）
- 起業人の受入準備経費
  (上限額：年間100万円(措置率0.5)/団体)

**期間**

6か月～3年

# 空き家活用株式会社 × 栗山町

# 官民連携による空き家対策

## 地域活性化起業人 李 賢 模 さん

適切な管理が行われていない空き家は、防災、衛生、景観等の観点から地域住民の生活環境に深刻な影響を及ぼしており、空き家対策とその利活用は全国的な地域の課題になっています。

李さん（派遣元企業：空き家活用株式会社（東京））は、令和４年７月から栗山町に派遣され、空き家の流通及び活用の促進、空き家の適正管理等に係る所有者への意識啓発・相談、空き家の相談窓口強化に係る人材の育成に関することなどの取組を行っています。

**プロフィール**

**李 賢模（イ・ヒョンモ）**

韓国出身。日本の大学卒業後、株式会社リクルートにて約10年勤務。2020年から現・派遣元企業に就職。取締役COO。

### ▼増える空き家

町では、近年、移住希望者から空き家の問い合わせが急増している反面、紹介できる空き家が少なく、マッチングに至らないといった課題を抱えており、空き家の流通促進と空き家を活用した移住定住人口の増加を目指し、空き家対策に係る即戦力とノウハウが必要であることから、地域活性化起業人の制度を活用しました。

### ▼空き家対策の技術・ノウハウ

李さんの派遣元企業では、空き家対策として、空き家に特化した管理システムの開発や空き家所有者対象の相談窓口などを手がけており、李さんは、そこで経営戦略、事業企画などの業務を通じて、空き家対策への知見や、目標達成に向けた仕組を開発する経験を培ってきました。

### ▼調査から利活用までの一貫支援

李さんはこうしたノウハウをいかし、町と一緒に空き家対策の仕組みをつくり、町で運用できるように支援しています。

空き家対策の重要なポイントとして、「空き家を調査、その調査した所有者に対して、空き家の管理を促し、利活用のアプローチにつなげるまで一気通貫で支援すること」を挙げ、空き家管理システムの導入、空き家所有者向け相談窓口「栗山町アキカツカウンター」の開設を行い、現場での運用を始めています。

### ▼官民連携の相談窓口

「空き家対策において一番大切なことは、行政の力だけではなく、しっかりと民間と官民連携していくことです」と話す李さん。

町は納税情報によって空き家の所有者を特定できるため、ダイレクトメッセージ等で、空き家の所有者に対して適切な空き家管理の啓発、相談窓口の紹介ができる一方、町が相談窓口になると、個人の財産に関わる空き家の相談は、行政として踏み込みにくく、アドバイスしにくいといった課題がありました。

そこで、空き家管理システムにより、地図に空き家と空き家ではない物件等の情報をデータベース化し、さらに、相談窓口を派遣元企業が担うことで、相談者に対して、専門アドバイザーが空き家解消に向けた工程を提案し、必要な事業者の紹介など、一つの窓口で全て対応できるため、相談者にとっての利便性が向上しました。

こうした官民連携によって、令和４年９月に開設された「栗山町アキカツカウンター」への相談件数は11件、そのうち5件は空き家利活用に向けたマッチングが成立し、移住希望者への空き家提供につながったケースもあるとのことです。

### ▼持続可能な体制づくり

「空き家対策のスキームづくりから運用まで、スピード感をもって取り組めたため、成果が出ており、町から評価をいただいている」と話す李さん。「任期はあと1年なんですけど、別に任期が終わったからといって、全部終わるという話ではないんですよね」と自身の任期を見据えた次なる目標は、地域おこし協力隊による空き家対策だといいます。

李さんは「地域おこし協力隊が空き家管理システムを使った空き家調査、相談者への対面による対応、現地の物件訪問などの業務を担えるように、任期中にレクチャーし、自走できるようにサポートしていきたいです。そして、地域おこし協力隊の任期を終えても隊員が町に定住し、町の空き家対策を続けられるよう、空き家を活用した地域活性化につながる仕事を一緒にやるなどの出口をちゃんと設けて、これからもしっかりとやっていく。こうした仕組みを北海道で広めていきたいです」と意気込みを語っていただきました。

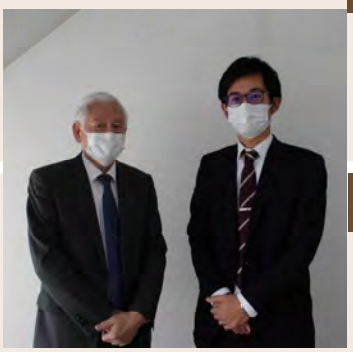
▲ 調査では、調査員が空き家管理システムアプリが入ったタブレット端末を操作し、システムに沿って空き家の判定を行い、登録する。

# 株式会社オズコンサルタント × 月形町

## 町温泉・ホテルの経営改善と賑わい拠点の創出

地域活性化起業人 里見昇さん 高橋克典さん

月形町は、指定管理により運営する「月形温泉ホテル」の経営改善や施設の魅力向上に向けて、令和4年4月より里見さんと高橋さんの2名（派遣元企業：株式会社オズコンサルタント（東京））の派遣を受けています。里見さんは支配人、高橋さんはマネージャーとして、民間ホテル運営のノウハウなど専門的な知見による温泉・ホテル運営の見直しとともに、同施設は町内観光拠点の一つである皆楽公園エリアの中核施設でもあることから、設備改修により施設の魅力を上げ、集客力を高め、エリア一帯の賑わいの創出に向けて取り組んでいます。



**プロフィール**

**里見 昇**（さとみ のぼる）※写真左

北海道函館市出身。約40年間ホテル業界に勤務し、幅広くホテル業務を経験。2018年に現会社に就職。

**プロフィール**

**高橋 克典**（たかはし かつのり）※写真右

兵庫県神戸市出身。旅行代理店、ゲストハウス、ホテル等多様な業務を経験。2020年に現会社に就職。

### ▼町温泉・ホテルの経営不振

当初、同施設は町の指定管理を振興公社が受けて運営を行っていました。

その後、サービス向上、指定管理料の削減等を目的に指定管理を民間企業が受けることになりましたが、約3年で経営不振により撤退しました。再び指定管理を振興公社が受けましたが、飲食部門の不振や設備の故障などにより、経営が更に悪化。専門的な知見が乏しいこともあり、経営が改善されない状況が続いていました。そこで、地域活性化起業人制度を活用し、ホテル運営のノウハウなど専門的知識を有する専門人材の派遣を受けることになりました。

### ▼豊富なホテル勤務経験

里見さんは約40年ホテル業界に勤め、ホテルの清掃やフロントスタッフ等の現場業務からマネージャー業務、支配人業務まで幅広く経験してきました。高橋さんは、旅行代理店での勤務を経て海外生活やゲストハウス運営、ホテルのフロントスタッフ等、旅行・ホテル業界で豊富な経験を積んできました。二人は、ホテル業務全般を支援する派遣元のオズコンサルタントで、経験をいかしてホテルの運営や開業準備などに携わってきました。

### ▼温泉・ホテル運営を一から見直し

着任後、二人はホテルの経営を民間の視点で徹底的に見直し、改善を図りました。具体的には、ホテルの運営収益見通しの作成、老朽化したホテルの改修コンセプトや改修に向けてのスケジュール案の作成等、ホテル運営の方向性を決めていく業務に着手すると同時に、現場スタッフと一緒に作業する中で、日常業務の内容についても一から見直しを行いました。ホテル稼働率向上のための予約販売方法の見直し、効率的なスタッフの配置、シフトの最適化、細やかな部分では使用頻度の低いアメニティの見直しや売店の商品の入れ替えなど、二人のプロ目線のチェックにより大幅に見直しを行いました。現場経験が豊富な起業人の知見により、経営のマクロな視点の部分だけではなく、日常業務等の細かい部分を含め、ホテル運営を幅広く改善していくことが可能となりました。

▲ 毎月開催の振興公社運営会議、施設改修関係の定例会議では、起業人から助言を受けているほか、起業人の毎月の活動報告を行う。

### ▼経営改善と従業員の意識の変化

二人が着任してから約1年と、まだ短い期間ではありますが、ホテルの経営改善の成果が着実に出ています。客室の稼働率は、令和3年度に約43％だったものが、翌年度は約73％まで回復しました。さらに、飲食部門の朝食の提供の再開やホテルの新たな宿泊プランの開発や町民還元祭などのイベントを企画するなど、集客の増にも大きく貢献しています。また、これまでホテル等での勤務経験が少なかった従業員に、日々の業務の中でOJT形式で人材育成を行うことで、質の高いサービス提供につながるとともに、従業員の意識改善にもつながっています。

### ▼町の賑わい拠点の創出へ

里見さんは、「地域の観光資源としてのポテンシャルを持つ施設をどういかして見せていくか、また、魅力化したものを一過性のものとせず、持続可能なものとすることが大切」と語ります。

月形温泉ホテルは、設備改修による効率化やランニングコストの削減等を図るとともに、町内観光拠点の一つである皆楽公園エリアの中核施設でもあることから、施設そのものの魅力を高め、集客力を高めるため、二人は、改修に関する助言、さらに令和6年度のオープンを目指す道の駅開設への助言など、町の賑わい拠点の創出に向けても取り組んでいきます。

# 日本航空株式会社 株式会社エイチ・アイ・エス × 中富良野町

# 観光を軸とした地域活性化

地域活性化起業人 西川光輝さん 酒井広志さん

初夏のラベンダーで有名な中富良野町では、ラベンダーの最盛期以外の人々の交流や賑わいの創出などの課題解決に向けて、西川光輝さん（派遣元：日本航空株式会社）と酒井広志さん（派遣元：株式会社エイチ・アイ・エス）の2名が町に派遣されています。二人は長く旅行業界で培った地域を見る目と人脈をいかしながら、地域おこし協力隊や若手職員と一体となって中富良野町をより住みやすく、楽しい町にする「ナカフライフ5か年計画」を策定。実現に向けて連携して取組んでいます。

**プロフィール**

**西川 光輝（にしかわ こうき）**

登別市出身。旅行会社セールス・法人セールスなどを経て、網走営業所、北見支店では地元観光業者と誘客施策の構築などのほか、旅客販売施策の構築を長年経験。

**プロフィール**

**酒井 広志（さかい ひろし）**

福島県出身。1997年株式会社エイチ・アイ・エス 仙台入社。2012年より北海道・東北・新潟事業部に異動。主に海外旅行商品の航空仕入などを経験。

## ▼シーズンオフが課題

北海道のほぼ真ん中に位置する中富良野町は、6～8月にシーズンの最盛期を迎えるラベンダーをはじめとする観光資源に恵まれた町です。

しかし、ラベンダーのシーズン以外の観光資源や人々の交流、賑わいの創出などの課題解決に向けては、他の市町村と同様に、町の人口減少や都市部への流出などもあり、行政単独のノウハウや財源に限界がある中で、官民連携の必要性・重要性を感じていたことから、地域活性化起業人の制度を活用することにしました。

## ▼豊富な観光・誘客の経験

西川さんは長年、旅行会社や法人への航空券セールスなどで経験を積み、北見・網走での勤務、東京支社在籍中には神奈川、長野、静岡などの地域を担当し、地域への誘客促進のための自社キャンペーンやイベントの企画などに取り組んできました。

酒井さんは個人旅行商品を主力とする派遣元企業で主に海外旅行商品の航空席の仕入れなど、管理部門を長く経験し、社内での人脈を築いてきました。

## ▼仲間づくりと企画・実践

二人は中富良野町の新たな賑わいの創出や年間を通した誘客のため、町をより良く、楽しくしたいという役場の若手職員や地域おこし協力隊からメンバーを募り、総合計画のグランドデザインとなる、「ナカフライフ5か年計画」の策定にとりかかりました。

西川さんは、「主にこれからここで暮らしていく人たちが、中心になってまちづくりを考えなければ根付かない」という思いでプロジェクトを立ち上げ、最終的に14の企画が生まれました。

この計画では、移住者が地域とつながりを持つ仕組み「ナカフサークル」の立ち上げや、町に伝わる「大注連縄作り」などの伝統を体験コンテンツにいかすなど、町外からやってきた二人と若手職員、地域おこし協力隊による従来のまちづくりの方針に囚われない自由な発想が採用されました。今年、既に5つの企画が予算化され、同メンバーで実現に向けて動いています。西川さん自身も、通常は観光オフシーズンである冬季の観光コンテンツ開発に向け、地域との情報交換を進めています。「こうした企画が単年度で終わるのではなく、今後、町においてずっと残るようなモノ、コトにしていきたい」と西川さんは意気込んでいます。

## ▼外に向けての発信充実

酒井さんの派遣元企業であるエイチ・アイ・エスは個人旅行商品が主力で、酒井さんも長年携わってきましたが、当初の中富良野町のイメージは〝ラベンダー〟一辺倒だったそうです。しかし、同じラベンダーでもリフトに乗って見る景色やサスティナブルな運営に特化したワイナリーなど、住んで初めて知った魅力的なコンテンツがあり、昨年度は派遣元企業主催の世界を巡るオンラインツアーの中で中富良野町をツアーに組込み、連携したPRを行いました。今年度は、イベントの時期などに合わせてバスツアーを造成し、送客につながる取組を計画するなど、派遣されている観光協会で地域おこし協力隊とも連携しながら、ブランディング事業や町外に向けての活動を活発化させ、攻めの観光施策を進めています。今後は、「移住希望者に向けたモニターツアーなどを通して移住実績に寄与したい」と意気込みを語っていただきました。

▲「ナカフライフ５か年計画」の策定には、役場の有志の若手職員や地域おこし協力隊が参加し、庁内横断的に取り組んだ。

本記事の取組は、北海道総合政策部官民連携推進局が担当しております。
○地域活性化起業人制度に関するお問い合わせ先 地域おこし協力隊サポート推進室 TEL:011-204-5791

# ボールパーク構想と連携したまちづくり

**北広島市のボールパーク構想**

未整備公園をきっかけとした官民連携プロジェクトとしてボールパークを整備することで、北広島市のアイデンティティを高め、未来の担い手となる居住者や企業立地を促進しながら、持続的な都市経営と社会課題の解決を図る地方都市の再生モデルの実現を目指す構想

今年3月、北広島市に北海道日本ハムファイターズの新球場「ES CON FIELD HOKKAIDO」を含むボールパーク「HOKKAIDO BALLPARK F VILLAGE」が開業しました。

このボールパークは、プロスポーツの試合観戦という役割だけではなく、子供の遊び場、商業施設、グランピング、農業学習施設などの様々な機能を備えており、多くの人々が集い、交流を育む場所になることを市は期待しています。

市では、官民連携プロジェクトとして、新球場を核としたボールパークを整備することで、まちづくりの様々な分野に波及効果を生み出し、持続可能な都市経営と地域課題の解決を図るボールパーク構想を推進しています。ここでは、市のボールパーク構想と連携したまちづくりについて紹介します。

## ―― 新たな賑わいと交流拠点の誕生

### 北広島市の現状と課題

札幌市と新千歳空港の中間に位置する北広島市は、JR札幌駅まで約16分というアクセスの良さを持ちながら、豊かな緑の環境を保持するなど、自然と利便性の高い都市機能が調和する魅力的な住環境を有する一方で、他の市町村と同様に、急速な少子高齢化、人口減少による活力低下や、また、5つの生活圏で形成される地区の分散と都市機能の不足、それによる人口流出が生じているなど、地域特有の課題があります。

### ボールパーク誘致の経緯

平成27年10月、市は未整備となっていた総合運動公園予定地の活用のため、プロ野球の2軍試合の誘致を念頭に、総合運動公園の中に硬式野球ができる施設規模の野球場を建設することを検討していました。

そうした施設規模のヒアリングのため、北海道日本ハムファイターズとの意見交換を行ったことがきっかけとなり、野球を観戦するためだけの施設ではなく、球場を核としたまち〝ボールパーク〟を作りたいという球団の意向と〝Sports Community〟を掲げる企業理念を受け、新球場を核に賑わいや交流を創出するエリアとなるボールパークの整備を契機として地方創生を図ることが、市の目指す都市像の実現に大きく寄与すると考え、ボールパーク誘致を表明しました。その後、球団側と約17回の実務者協議を重ね、まちづくりへの想いを共有し、両者の想いが合致したことで、平成30年3月に予定地として内定しました。

ボールパークの施設整備は球団、その周辺の道路等のインフラ整備は市が役割を担いながら連携して進めていき、今年3月に開業となりました。

### ボールパークに期待される役割

今年3月に開業したばかりのボールパークですが、プロスポーツの試合観戦という役割だけでなく、北海道、地域のシンボルとして、多くの人々がまちに集い、交流を育む場所として、今後のまちづくりにおいて重要な役割を担っています。

ボールパーク内には、屋内外に遊具が備えられた子供の遊び場、北海道らしい自然を感じながらグランピングや

**お話を伺った方**

左から 北広島市 企画財政部企画課 村上主査
熊谷主査
経済部ボールパーク連携推進室 万丈主査

サイクリングなどの体験型観光ができる施設、農業学習ができる施設など、野球以外の目的で訪れた人も滞在できる環境となっており、試合のない日も、1日約5千人～1万人が来場するなど、これまで新千歳空港までの通過地点だったまちに、多くの人が滞在することで、すでに多くの賑わいが生まれています。

今後、市民と市外から訪れた人たちで一緒に取り組めるボランティアイベントなども開催していくなど、ボールパークが新たな交流が生まれる場となることを期待しています。

▲屋内外に備えられた子供の遊び場は、天気を気にすることなく遊ぶことができ、家族が試合を見ている間に利用するなど、様々に活用されている。

▼広大な敷地内には、子供のプレイグラウンドやグランピング施設、認定こども園などがあり、一つの村のようになっている。

## ボールパーク構想による新たなまちづくり

市はボールパーク構想と連携したまちづくりを総合計画の中に盛り込み、一体的に推進することで、市民の健康増進、雇用の促進、公共交通の整備、JR新駅の整備など交通機能や産業機能の充実をめざすこととしています。球団を含めた官民連携による取組や、全庁横断での取組など、様々な施策により、ボールパークを核としたまちづくりを進めています。

## 球団との連携によるまちづくり

様々な分野で球団との連携事業も進めており、学校教育の分野では、市内の小中学校全校で、元選手の球団職員による子供たちの走力向上や、基礎運動能力を伸ばす体育授業を行う取組、プロ野球を通して幅広い経験をしてきた元選手によるキャリア教育授業などの取組を連携して実施しています。そのほか、選手の管理栄養士による子育て世代への食育講演会など、双方の発展につながるような取組も実施しています。こうした特色ある教育環境の提供やスポーツ機会に近い健康的なライフスタイルの提供により、市民、そして子供達が地域に誇りと愛着を感じるまちを目指しています。

また、北海道、球団と防災に関する覚書を締結し、球団がボールパークの中に防災備蓄倉庫を整備し、市の広域避難場所での活用のほか、道内で災害が起きた際に被災地に分配できるように北海道の備蓄品も備えるなど、防災拠点としての役割を官民連携で担っています。

## 近隣市町村との連携

多くの賑わいから地域の活性化を生み出すボールパークの効果を周辺市町村にも波及させるため、ボールパークを通じた道内各地の活性化をテーマに「オール北海道ボールパーク連携協議会」による広域連携体制を確立しています。現在は圏域の17市町村が参画し、4分野をテーマに圏域市町村で連携した取組について検討しています。

今後、周遊策として、ボールパークを起点とした圏域市町村を巡る広域サイクルイベントなど、ボールパークから人の流れを周辺に促す試みも圏域市町村で連携して取り組む予定です。将来は、道内広域にも波及効果を生み出していくために、オール北海道で取り組むことも視野に入れています。

## 今後の展開

市の人口動態はボールパークの移転が決定した平成28年から転入超過の状況が続くなど、機運の高まりを見せ、すでに開業によって新たな賑わい拠点による交流人口の増加に寄与しているボールパークですが、市は、今後はその効果がさらにまちづくりの様々な分野に波及していくことを期待しています。

ボールパークへのアクセス拠点となるJR北広島駅西口の活性化を株式会社日本エスコンと官民連携で進めており、駅前広場が再整備されたほか、今後は未利用市有地を活用した居住空間、ホテルや飲食店を含む商業施設、子育て支援施設や交流広場を整備するなど、駅周辺の魅力と価値を高め、賑わいと交流を生む拠点等を新たに形成するなど、まさに「北広島の新時代」を見据えたまちづくりを進めていきます。

## ―― オール北海道で波及効果を生み出す

活性化を進める 駅西口周辺エリア

▶北海道ボールパークFビレッジへのアクセス機能整備と駅周辺エリアの魅力と価値の向上を目指し、官民連携で駅周辺エリアの高度利用を図り、地域課題解決に向けて施策を進めている。

イメージ図提供：㈱日本エスコン

本記事の取組は、北広島市企画財政部企画課・経済部ボールパーク連携推進室で担当しております。
○事業に関するお問い合わせ先　TEL:011-372-3311

# 『なおみちカフェ』から

## ～地域創生のヒントを探る～

▲ 会場となったオホーツクミュージアムえさし。「ふるさと教育」推進プロジェクトと連携し、ワークショップなども開催している。

宗谷編

**なおみちカフェ**

**鈴木知事が、北海道創生に向けて、様々な分野で活躍されている方をお訪ねし、その取組や地域への思いなどをお聞きしています。同行した職員から皆様にその様子をお伝えします。**

## 令和4年11月22日訪問
## 枝幸町「ふるさと教育」推進プロジェクト編

今回まずご紹介するのは、高校生を地域コミュニティーや地方創生に活力を与える重要プレイヤーとして育成を図る、枝幸町「ふるさと教育」推進プロジェクトです。

枝幸町では、急速な少子高齢化などにより教育環境にも影響が現れ、町外都市部への進学により保護者を伴っての世帯転出などから町内唯一の普通科高校である道立枝幸高校の将来的な存続が大きな課題となっていました。

そのような中、令和元年度に枝幸高校と地域が連携して、地域創生に活力を与える重要なプレイヤーである高校生の育成に向け「学力向上」と「ふるさと教育」の推進によって地域とのつながりを強く持ち、地域の産業や経済を支える人材育成を図る「ふるさと教育」推進プロジェクトを立ち上げ、将来の地域人材を育成する取組を進めています。

取組の一つとして注目されているのが、令和3年4月に開設した公営塾です。塾長は、もともと東京の学習塾で教室長をしていた齊藤歩さん。地域おこし協力隊として着任し、高校生を対象に公営塾を始めました。

「これからより不確実で難しい時代を子ども達は生きていくと思うので、子ども達には、不確実で答えがない、よくわからないところを面白がってくれるような逞しさを身に着けてほしい」と齊藤さんは話します。

塾は無料で、枝幸高校の全ての生徒が利用できます。公営塾は、学力向上だけでなく、枝幸町の魅力や誇りを再確認する機会も提供しています。実際に、公営塾では、学校の授業のようなものではなく、英文かるたや英語のすごろくなどを通じて、勉強する楽しさや学ぶ意欲を高校生の内側から喚起するような取組や将来の枝幸を背負って立つような人材の育成を目的に、地域の方々をゲスト講師として授業を行うなどキャリア教育の取組も行われています。

枝幸町の公営塾のような地域の資源や人材をいかし、地域の未来を担う若者たちの力を引き出す取組が広がることを期待しています。

▲ 枝幸町公営塾Facebook

塾では、個別学習指導による学力向上のみならず、キャリア教育などを通じたふるさと教育も展開されている。

### 当日の知事の言葉から

社会に出ると、自分が生まれ住んでいた地域がどういうところなのか、町内に住んでいた時以上に聞かれることが多くなります。町の誇りをお話できるというのは本当に素晴らしいことです。こうした、高校生をキープレイヤーとして巻き込み、地域の活性化に一役買ってもらう取組は、郷土愛の醸成や将来の担い手確保にもつながるものだと思います。

▶懇談時の様子

なおみちカフェ（枝幸町編）の動画はこちらからご覧いただけます。（YouTubeチャンネル）

▲ 令和3年4月に「総合学科」として開校した北海道大空高等学校。自分の興味ある科目や進路に合わせた科目を選択して学ぶことができる。

## オホーツク編

# 令和5年1月24日訪問
# 北海道大空高等学校　編

次に、大空町の全日制総合学科の町立高として、道内はもとより全国から生徒が入学している大空高等学校についてご紹介します。

令和3年4月、大空高校は、道内初の道立高と町立高を統合し、新設の町立高等学校として、29名の新入生を迎えて開校しました。

民間出身者を校長に招き、地域資源をいかした授業や情報通信技術（ＩＣＴ）を活用したユニークな教育を行っています。

町は、大空高校を町総合戦略において地域振興の核として位置付け、地域全体で町の創り手を育成することを目指しています。

生徒の皆さんが自ら考え主体的な学びを育むことを教育目標としており、生徒自身が主体となって考えるように細かい校則は無く、総合学科であるため選択教科も多く自分で進路に応じた授業を受けていきます。

探求力を育むため、探求的な学習の時間においては、通常より単位数を増やし、生徒が自身の興味や関心によってテーマを決めて、情報を集め、課題を解決するための考察、実践を行う授業を展開しています。

関係人口創出をテーマに、生徒が地域の方々とお会いして聞いた地域課題の問題解決に、高校と民間企業、町が一緒になって取り組み、町長や町民などの前で政策提言を行うなど、人づくりとまちづくりの一体化を目指しています。

生徒同士の学び合いの機会を増やすため、一斉授業を改め、複数担任制の導入や定期テストの廃止など、新しい観点により、校長を中心に学校改革を推進しています。学習以外にも生徒の興味や関心を促すため、生徒が企画するボランティア活動やレモネードの販売による小児がんのための寄付、生徒達が運営する高校生カフェの企画も進められています。

また、令和5年4月に供用開始した高校の寄宿舎機能と地域住民や有識者との交流機能を併せもつ施設を整備。生徒の進路に合わせて学習をサポートする町公設塾の教室や地域交流拠点として活用しています。今後、町民と高校生の交流を深めるための住民支援組織の設立に向けた準備を進め、全国の生徒から魅力ある学校として選んでもらえるよう魅力化プロジェクトを進めていく予定です。

▼令和5年4月に供用が開始された寮の外観イメージ

なおみちカフェ（大空町編）の動画はこちらからご覧いただけます。（YouTubeチャンネル）

### 当日の知事の言葉から

高校の存在というのは、地域の大きな一つの機能です。

それぞれ首長の皆さんと教育部局が連携し、地域と協働して色々なことに取り組んでおり、特色のある教育が行われています。町全体を学びのフィールドとして、教育と地域づくりを融合させた素晴らしい取組であり、これからも地域の未来を担う人材の育成に取り組んでいただきたいと思います。

Hokkaido Work×Vacation
— 北海道型ワーケーション —
つながる。感じる。生まれる。

# 北海道型ワーケーション推進事業

# つながる。HUBest（ハーベスト）

## ～人と地域がつながる ベストな場所（ハブ）が北海道にはある～

**「つながる。ハーベスト」とは？**

「新しい働き方」として注目されているワーケーション。その魅力のひとつでもある、人と地域とのつながりを通じて新たな活動を生みだすことができるワーク施設と、そこでの出会いを創り出すコンシェルジュをインタビュー形式で紹介します。

**第十一弾 名寄市**

**naniro BASE&Lab.**
**黒井（くろい） 理恵（りえ）さん**
（naniro BASE&Lab. 副所長）

## 立ち上げの経緯

**――こちらの施設は2015年に「なにいろカフェ」という名称で開かれたのが始まりとのことですが、立ち上げに至った経緯を教えていただけますか。**

立ち上げ前年の2014年に私は名寄にUターンしたのですが、最初の3～4か月くらいは、地域の方々に名寄の色々な課題をヒアリングして回りました。

その際「何か始めたいと思っても相談する場所がない」「一緒に取り組んでくれる人をどう探せばいいか分からない」という悩みを聞き、コミュニティスペースの必要性を感じました。

**――具体的にはどのようなコンセプトで開設されたのでしょうか。**

私自身、よりよい社会をつくっていきたいというキーワードを持っていて、「一人一人がやりたいことをしっかりできる社会であること」「その人をサポートするコミュニティがあること」の2つが大事だと考えています。高齢者福祉や子育て、環境問題など、身近な社会課題に対して何かしたい、という人が集まる場づくりが出来ればと考えていました。

「なにいろカフェ」は5年ほど運営しましたが、スペースが手狭で人々が行き来する場になれなかったこともあり、2020年に移転し、現在の名称で、「名寄の街を、クリエイティブに遊ぶ人たちの社交場。動き、交わり、学ぶ、楽しむイノベーションスペース」をコンセプトとして運営しています。

## 現在の「naniro BASE」

**――これまで取材した施設では、コロナ禍でなかなか人が集まるコミュニティスペースとしての機能をいかしきれていないとの声もありました。その点の影響はいかがでしょうか。**

今お話したとおり、元々は主にコミュニティスペースとして運営していたのですが、コロナの影響で現在は大きく業態を変えています。

移転した当初は、コワーキングスペースとして週3日開けて、夜はテーマ型のバーをやってました。お酒を飲むだけじゃなくて、映画・音楽・SDGs・教育など気になるテーマを持ち寄って対話し、化学変化が起きる場を目指していました。

**――面白い取組ですが、コロナ禍でバーというのは難しかったのでは。**

初めての人が一つのテーマで話すことに価値があったのですが、お酒という面もあり、難しくなりましたね。

なので、コロナ禍以降はコワーキングとレンタルスペースを主に運営していて、2022年4月からはより利便性を高めるため、「いいオフィス」に登録し、完全無人型としています。

「いいオフィス」を見て市外から来られる方は月に1～2名程度ですね。それ以外には普段からつながりのある市内の方が利用してくださっています。

**――「いいオフィス」のページには、「市内の面白い方とつながりたい人はいつでもご相談下さい。」と記載されていますが、事前に相談すれば対応いただけるということでしょうか？**

はい。他の仕事もあり常時ここにいるわけではないので、まずは事前に相談いただければと思います。

※いいオフィス 全国のコワーキングスペースを検索・利用できる会員制サービス

**コミュニティスペース naniro BASE & Lab**
名寄市にある唯一のWi-Fi・電源完備のワーキングスペ ース。現在は無人で営業。

## 「naniro BASE」からつながる

**――これまでワーケーションを通じて生まれた、地域とのつながりエピソードなど教えていただけますでしょうか。**

昨年の夏に、首都圏在住の映像編集を仕事にしている方がワーケーションに来られたのですが、最初は1か月の予定が、居心地が良すぎて3か月に延長されていました。

**――その方は「北海道型ワーケーション」のワンストップ窓口に相談いただき、名寄市をご紹介させていただいたのですが、3か月も滞在されていたとは！**

この場所でお仕事をされていたので、ここでやるイベントに参加したり、出入りする地域の人たちと仲良くなって、釣りなど色々と遊びに行かれてました。

他のケースでは、観光ブランディングを専門とする企業さんがチームで来られました。地域活性化について現場の意見を聞きたいとヒアリングに回ったり、他には普通にミーティングやお仕事されていましたよ。

彼らは2泊されたのですが、「森の休暇村」という自然の中にあるコテージをオススメして、1日目は市内で私たち市民と飲み会、2日目は名寄名産「星空雪見法蓮（ほうれん）草」で鍋をしてはどうかと提案しました。組織のチームビルディングで一緒に食事の用意をするというのは効果的なんですよね。実際、「いつもと違う一面がみられて関係性が深まった」「思考が開いてアイデアがたくさん出た」などの高評価をいただきました。地元の人やモノ、場所、住んでいないと知り得ない体験や情報などを、来てくれる方の特性やオーダーにあわせて、ご紹介したり、コーディネートしています。

**――地域のことを学びながら、仲も深められるチームビルディングは最高ですね。**

本当はこういったプラン立てをもっとうまくして、チームビルディングを兼ねたワーケーション受入が進むといいなと思っています。私に相談していただければ、企業の社内ビジョンやコンセプトの形成を、ファシリテーターとして支援することもできるので。

**――来る企業にとっても、より有意義なワーケーションとなりますね！**

## 名寄のオススメ

**――これから来られる方に向けて、名寄で是非体験してほしい！というものを教えていただけますか？**

「なよろ健康の森」の森歩きがオススメです。ウッドチップが敷かれていて、夏は走ることも出来ますし、冬だとスノーシューやクロスカントリースキーも無料で借りられます。

あと、釣り人が憧れる「天塩川」や雪質日本一の「ピヤシリスキー場」、ちょっと足を伸ばして朱鞠内湖（幌加内町）でのワカサギ釣りなど、身近に本格的なアウトドア体験の場が沢山あるのが、他の地域にない楽しさだと思います。

都会にいたら、体験場所まで行くのに何時間もかかるところ、ここでは30分以内で体験できるので、仕事と遊びが純度高く両立できると思います。

**――特急が停まり、大型商業施設や総合病院が立地し、コワーキングスペースもある。さらに本物の自然の遊びが近い、道内でもなかなか貴重ですね。**

飲食店も多くて、スナック文化も根付いてます。二十代の若い人でも二次会などでスナックに行くんですよ。都会から来た人にご紹介すると、凄く面白そう！と仰っていただけますね。

**――最後に、これから名寄に来られる方にメッセージをお願いします！**

飲食店が充実している名寄市。こちらは**「最強スープカリーブッダ」**の本格的なスープカレー。

名寄は、特に北海道に何回も来られている方にとって面白い場所だと思います。来る時間はかかりますが植生も北欧に近いものがあるので、日本語が通じる海外という感じで来ていただければ。それくらいの異国体験はできると思います。

あとは企業ビジョンを形成したいとか、一年の計をチームで立てたい等、普段の会議室ではなかなか話せないことを考える時には、環境を変えるのが良いと思います。ご相談いただければ私もサポートしますので、是非名寄にお越し下さい！

**過去のインタビューは、「北海道公式ＨＰ」「北海道型ワーケーションポータルサイト」にて公開しています。是非ご覧ください。**

道庁ＨＰ

ワーケーションポータルサイト

該当する施設とコンシェルジュをご紹介中！

**「つながる。ハーベスト」対象施設**

○テレワークができる施設
○地域を知るコンシェルジュがいる施設
○誰もが気軽に利用できる施設
○地域住民も利用している施設

本記事の内容は、北海道総合政策部地域創生局地域政策課で担当しております。
○事業に関するお問い合わせ先　TEL：011-204-5089

創る
令和5年7月発行
発行：北海道総合政策部地域創生局地域戦略課　電話（直通）：011-206-7298

# 北海道に「住んでみたい」「暮らしてみたい」の総合相談窓口

北海道庁では、北海道への移住を考えている方や、北海道での暮らしに関心をお持ちの方からのさまざまなお問い合わせ・ご相談に対応する窓口として、東京有楽町駅前、東京交通会館8階に「どさんこ交流テラス」を開設しています。

北海道の市町村情報をはじめ、「しごと」、「住まい」、「暮らし」などに関する情報提供とともに、ご相談にお答えします。

ぜひ、お気軽にお問い合わせください！

## 北海道への移住相談に相談員が対応！

〇どさんこ交流テラスでは、専属の相談員があなたのお話を伺います。
北海道の冬の暮らしや興味のある地域の情報など、あなたの悩みに親切ていねいに対応し、移住の実現をサポート！

## 北海道の暮らし情報が盛りだくさん！

〇道内１７９市町村の情報や「しごと」などに関するパンフレットを多数取りそろえています。

〇北海道の情報が入手できる移住関連イベントの情報も、随時お知らせしています。

**相談は、対面・オンライン（要予約）のほか、電話、メールでも行っています！**

### ◎ どさんこ交流テラス（北海道ふるさと移住定住推進センター（東京））

場所：東京交通会館８階
　認定NPO法人ふるさと回帰支援センター内
（東京都千代田区有楽町２－１０－１）
開設時間：火曜日～日曜日　10:00～18:00
（定休：月・祝日　夏季および年末年始休業あり）
お問い合わせ
TEL：090-1541-0011
E-mail：hokkaido1@furusatokaiki.net

**北海道でも相談を受け付けています！**

### ◎ 北海道ふるさと移住定住推進センター（札幌）

場所：北海道庁４階（札幌市中央区北３条西６丁目）
開設時間：月曜日～金曜日　8:45～17:30
　土曜日・日曜日　事前予約により適宜対応
　（祝日、年末年始は休業）
お問い合わせ
TEL：011-204-5089
E-mail：hokkaido.iju@pref.hokkaido.lg.jp

オンライン相談の受付はこちらから！

「創る」バックナンバーは、“ほっかいどう応援団会議ポータルサイト”へ

バックナンバーへ

ほっかいどう応援団会議　検索

ＵＲＬ： https://hkd-ouendankaigi.jp/info/tukuru.html